

工學博士福山敏男君の『寺院建築の研究』・『神社建築の研究』

(福山敏男著作集一—四) に対する授賞審査要旨

『寺院建築の研究』は上・中・下の三卷(福山敏男著作集一・二・三)から成る。

そのうち、上は、四天王寺、法隆寺、薬師寺、興福寺、当麻寺等に関する論文を含むが、本巻の半ばに及ぶ紙数は薬師寺の研究に当てられ、大和国高市郡木殿の本薬師寺の起原から平城京移建、それ以後現代に至る薬師寺の歴史を文献資料の精査によって明確にし、現存する同寺東塔の建築を、伽藍配置から造営時の使用尺度、柱、台輪、組物、尾垂木、軒天井、垂木、隅木、屋根、高欄、瓦、相輪などの細部にわたって、国内、国外の諸例と比較、検討して、白鳳時代後半、つまり持統、文武兩天皇の時期の建築様式であると論定している。

法隆寺に関する研究は、金堂の天井や天蓋に描かれた蓮花文様、および同金堂の支輪間、同堂天蓋の支輪間の蓮の波形唐草文様について精密に分析検討し、それらのエジプト、ギリシアに遡る原形から、インド、中央アジア、中国を経て、わが国に至る源流と変形を丹念に追求している。さらに金堂西大壁に描かれた中尊の後屏についてもその形式と装飾要素の綿密な分析的研究を行っている。最後にこれらの装飾文様を橘夫人厨子、薬師寺東塔、勸修寺繡仏などの装飾文様と比較し、その間の関連を詳しく述べている。

興福寺に関する論文は、白鳳、天平兩時代の弥勒像と弥勒浄土の表現を取扱い、さらにその源流を考察する。養老

五年藤原不比等の一周忌に、天皇御願として興福寺西院に弥勒本尊ら九体の諸像を安置した円堂が造られ、同寺金堂にも不比等の遺族によって、弥勒浄土を象どる群像が供養され、天平二年建立の同寺五重塔にも弥勒浄土変が納められた。元興寺金堂の弥勒ら九体像が興福寺金堂のそれらに先行し、五重塔では法隆寺の弥勒浄土の塑造がわが国では最も古い、すでに鎌足の弥勒信仰が厚かったと言われ、七世紀後半から弥勒の本尊やその浄土変が彫刻、絵画に頻りに表わされたことに言及している。そしてこれらの源流を辿って丹念に、インド、西域、中国の先例を探求し、小金銅像群から雲岡、龍門、天龍山、敦煌等の石像群、画像群を挙げ、四世紀末から八世紀にいたる弥勒の造像、その変相図作成の盛行が、わが国に時を経て影響を及ぼし、これらの造営を促したとする。

『寺院建築の研究』中は、東大寺、法華寺、唐招提寺、石山寺、栄山寺等に関する論文からなるが、本巻において東大寺関係の諸論考が重きをなし、特に東大寺と関連する奈良時代の写経所についての研究が注目される。正倉院文書には多数の写経所名が現れるが、それらは多くの異なる写経所が存在したからであるとす従来の説に對して、著者は東大寺内に置かれた写経所が、その書写する經典の名称の相違によって、随時その所名を変えていたものであり、東大寺写経所とその前身をなす一系統が主流をなしていたことを、多数の正倉院文書の内容を比較検討することによって論定している。巻の後半は、藤原武智麻呂の創立と伝える栄山寺の歴史と、寺内の八角堂の成立とその建築の研究に当てられる。八角堂の造営年代は正倉院文書によって天平宝字七年頃と論定し、その建築について特に内陣柱、外陣柱、貫、天井(通称天蓋)、組物、虹梁、戸口、窓、軒などを詳細に検討し、奈良時代の建築様式を有する堂であることを明示している。

『寺院建築の研究』下は、平安時代の延暦寺、東寺、神護寺、観心寺、仁和寺、醍醐寺、法性寺、法成寺、六勝寺、中尊寺、鎌倉時代の光明峰寺、鎌倉時代から現代に至る本願寺に関する論文からなる。そのうち、仁和寺については、創立期の事情を示す最も古い資料を集めて検討し、光孝天皇御陵域内の寺として出発したという極めて複雑で困難な問題の解明に努めている。中尊寺金色堂に関する論文は、平安時代の各時期にわたる貴族の葬礼史に関する多数の重要資料によって、各時期の特色を抜き出し、その成果に立って、金色堂の葬堂としての性格を特色づけている。本願寺の成立とその歴史を述べた論文は、京都東山の太谷にあつた最初の簡素で小規模な建物から出発して、幾多の変遷を経て、今日の大伽藍に到つた過程を述べている。なお東西両本願寺では、阿弥陀堂よりも御影堂の方が規模が大きいという特色をもち、東本願寺の御影堂は慶長九年創建、明暦、寛政、天保、萬延の重建を経て、明治二十八年の建立であるが、東大寺大仏殿と列ぶ大規模な木造建築物であることを指摘している。

『神社建築の研究』（福山敏男著作集四）は、出雲大社、住吉大社、伊勢神宮、斎宮寮、鶴岡八幡宮、吉田神社齋場所など、古代と中世の主要な神社を対象とした論文からなる。諸神社に関する多数の文献資料を精査、検討し、現状と相連する古い時代の社殿形式の復原に努めている。神宮の歴史に関する諸論文は本巻の約三分の二を占めるが、著者の学位請求論文『神宮の建築に関する史的調査』（昭和十五年刊）に不足していた内外両宮の正殿の鎌倉時代以降の歴史の部分などを増補している。また、応永二十六年度の、またはそれ以前の造替遷宮の外宮正殿の建築用材の員数と寸法を記した重要資料である「外宮正殿庭作日記」について、著者は一々の用語について解釈を加え、中世の外宮正殿の復原図を作っている。中世の神社建築を代表するものとして、鎌倉の鶴岡八幡宮と京都の吉田神社の齋場所太元

宮を取扱っているが、そのうち「斎場所」は足利將軍の室町殿の南方にあったと思われる吉田兼俱第内に建てたものであったのが、応仁の乱で吉田神社が焼失した後は、神楽岡の上に文明十六年に斎場所を再興し、吉田神社も同じ岡の上の北方に移して再興した。この斎場所は、兼俱が始めた唯一神道に拠って創案された特異な形式の社殿で、八角形の太元宮を中央に置き、左右二棟の建物に日本國中の諸神を個別に祀り、後方に、もと神祇官内にあったという八神殿を祀り、更にその後方左右に伊勢の兩宮を祀るといふ社殿配置をなしていた。著者は斎場所の來歴を特に詳細に追求している。

著者の六十年にわたる研究は、わが国の歴史上重要な地位を占める社寺の建築の造営、変遷の歴史を解明するため続けられ、終始一貫して、文献の博搜と厳しい本文批判の上に基礎を置き、旧説にとらわれず、常に新鮮な発想をもって、関連する史実をひろく包摂しながら日本建築史の根幹を組立てることに努めた。この様にして、著者は精密な文献学的、書誌学的研究に裏付けられた豊かな精神史的内容を有する日本建築史の新しい体系化を成就し、國史学、考古学、美術史学の各分野と密接な関係を有する文化史としての日本建築史学の發展に大きく貢献したものと認められる。